

燈下墨談

薩摩琉球兩談  
曾槃著 上

15  
1501  
1





墨談

上

門 15  
號 1501  
卷 1

燈下墨談 甲寅雜記中一種  
薩摩琉球兩談

分目

義弘公朝鮮を征する時御首途の詠物

義久公祈雨の御歌 祈の歌

近衛信輔公つくし又あまし時の活詠

新納忠元

設柴傳

和泉式部琵琶の縁起

平族遁去の地

韓人の裔

早稲田大学図書館  
昭和 35.10.14 購書  
藏書

何欽去

樵子

秋月

高元山

真幸正真

曾興

華人と師と

熊沢了海

宣正

類川某字學と通達

油芭紙の解

西安宣旨 或云廣東宣旨

花桐獨木船

能津芸蓆

空海と贈位と賜ふ 宣旨の写し

三曉菴雜志

ひらうこうそ かしらうそ

外城

封内郡卿及島島目次

定年續書目

琉球談

琉球

程順則

自了

琉球或ハ龍宮と稱ス

螺鈿器

琉球新解

歲貢者紀行の抄

進貢使の程及加費邊應進貢書寫

琉球談

酒肴饌饌大略

瓷器造燒法茶料

琉球征伐記略

琉球屬島目次

冊封使所記琉球品物并土名

燈下墨談

曾繁

寛政六年甲寅の冬陸奥のそとめ大に戸を  
 立いつく孫生の末の薩摩五の府まつきまつ事  
 りいづくもぬく薩摩の濱浦湯島の山登を  
 めくり其地産を覽し文丹の中ふより入り府  
 島の南院あり了日とて茶園修集あるは  
 へまつま枝も更し無聊ありけれも得家望使  
 をよみと濱とありつ親しき人の話ひあるま  
 ありしよの物語とてやかり或えまじ此  
 と無聊の資は次よまらるるまおづまじとて

ぬん

義弘公朝鮮を征する時序首途の詠歎

文祿元年十一月秋先君 無慮既歿弘公 後日誰

野日向國與所 今奥幸は 栗原野より朝鮮を征は


る途又赴む小崎みつかりその首途を祝ひ後日

てよみ有るは あり

野も山も皆白旗とぬりしなりこよひのやと

も徳衆のやと臣庶 仰ひて 君の別れを惜み

りしえま

わらたちの  の実人やそきこゝとていふ

發句とくらすまふ 後へん古語を衛り後へる臣

庶もぬへて競ひまみ 猶りうりといは此時先代の

遺光新納忠元 俊名武 をりて大に城と出で子春

御すま 公と送り奉り才の老はぬ所と後日

事のあらはさるるを深く嘆きぬしみるよみてま

はる家

あちきおや法滅まも おくはしとおあひし

ともむかひぬりたる 公の由道し

わらこゝや大和をかけた心のみうのふあひ

のふりさととも志る 公朝鮮よこゝ一萬の小勢

よき 河川の孤軍は捨て明兵十餘萬と防戦し後  
ひき退く無と追ひ寄して三萬八千七百餘級  
の首を執り關原の役よを六百餘の孤軍と扱ひ  
三衆帥と浪回せし雲霞の重圍をりしに四百里  
の山川を跋渉して歸陣し後へりて堅甲利  
兵君臣一致の智謀の尤き取敢えり  
別は崇吉年表  
軍字録あり

義久公祈雨の御祈符の事

義久公後は龍伯大隅五國分御富隈に居候し後  
への時夏のもくしり月と流てありねる日  
のとりつまさ水田も石木のぬく旱魃ヒアカリより早

苗は蓄りたまふはくち葉のやうにたれんぬりよ  
たるアツク跡主とるあ田人タノもくかカシ無頼の秋よあえ  
さらん能カシも嘆きカシ恨と取れ公もよみし  
民と憂カシ哀は祈候しりれといらよとせんか  
れあり日カシあひて大己光帝早鈴サスガの神は帯  
とるしと雲カシとるひくうその時のあふ  
ヤミよはよせのうけりてつねよみれぬて  
田のちのうもふはかきよ是君とて民と憫  
れみりふ誠心誠意を鬼神も感せしやふちよ  
ち高千穂の社より雲たしりて雨をさしりしあり







このあはく仁王殿若徑を精院でしむるすしえ  
しり

近衛信輔公つくりしあまのいづ

文保中近衛信輔公信輔公とpp又あまのいづ

あまのいづ一系院の傍にひそみむらり同公

日章師ミヤコの歸りせむふし時一系院主情忠上人名

殘と情みそふみえをさるる

およひぬさき井又さしけの親をいさして

ゆるしぬる信輔公の道

人めのみしるころあらすみ深の社をえと

しき名張ぬるるる今し為世海畔に近衛公の

称しき故迹此らまゝ當師の史所とぬれりまゝ

完閑山とて陰ひて

薩摩のいづみのかうへぬるるつぼまゝこれ也

籠紫のふどとていづみまゝ鏡池をみ陰ひて

薩摩のいづみ鏡の池のひらつをいづかの姿を友

と見りし人閑閑山と鏡池も皆類娃郡ありし

の外ふし内詠あり命尚尋ぬ

新納忠元

新納武為忠元と故郷少く天年を保ちしと

既に開卷 義弘公が鮮く赴きあふ候より  
より世に忠え開き果て歿せりと流傳する  
た誤れり ○豊臣秀吉公薩摩に臨戦の時忠え  
秀吉公の前は前日酒場りりる 市席に御出言お  
りて忠えに上段のいしするにれりて  
頼ひけとちんちんんと ひわらあけと興  
ふれ忠えを討つて

を暇のあつたすむの暇と口すま  
なる 浪連の童謡に夜に松出ちんくちりり  
○忠え <sup>草</sup> 吐れる 以ふ也 彼ぶらき 一人の家にあ

いそぐりりりり 其そそあし 出迎へりりり何  
やん物出る 紙ひとひらをひきまらあは  
入るを忠え物出と也 見えあし みん物と也  
いそぐ但一刀りりりり 喉をち血をそみ  
いそぐかきまりの紙と水に洗ひ 冥きりりり  
一首のああり

人ぬらそきれ也 ちむ小夜ふけてあつた  
まくらのかきふ梅と香とのあつてんがの勇  
士ぬらと哀と極めりり 温良の人とふ評あり  
〜

設樂傳

吾藩新姓郡仙田村川尻浦といふ所設樂踊と  
て婦女掌と拍と舞踊と之の八人をもをうち  
とやしウチウ溜ウチウ八人をも拍と起舞へり其歌曲の聲  
と水引延て優もやさしく壁ハ俣馬樂也と  
溜山ものよ車鏡は千景左胤傳了未似と溜しとあり當時を士  
林の詠曲あり座思島の北は俣馬樂といふ地名あり  
りむく俣馬樂と溜ふあり俣馬樂といふ地名あり  
とま西のかつこ河辺郡加世田郷あり  
り加世田といりへの笠沙崎の地  
其地は田畑とぬるまゝに加世田と云  
加世田家と稱あり男子の舞出ありその音曲を

いふ設樂ふくくまりてたりゆりひ傳ふ中昔  
まてを神樂家俣馬樂設樂也との詠曲を今の世  
の人の上曲とぞおぼえて慶賀歌とを能の言  
砂と溜りり如くぬりしを徳仁の亂後足利氏  
の末に到りたる事書り改れり人よまこ三絃  
の妓曲等らよ行なれ何とぬ雅曲を時の興致  
よ合んて今も古調の溜ひとままにぬれる人世  
よ抱まきり今類ニイ娃ハ郡ハ傳るる志こら酒の香  
と土人の説よえ天智帝の起り此ハ間まりし  
ませ時り奴まれりぬとすぬれと是も事

やと言ふ事人とおせり之柳 天智帝の頼娃  
即ち微幸し強へる事天智帝 帝明天皇の時  
新羅國反きて百濟と軍すと百濟を救ひ玉え  
んと 天皇筑前朝倉宮に親征ありたる時 天  
智帝すこ皇太子ふそ 天皇の扈從し玉ひゆる  
この時 天智帝薩隅乃地まで進視し玉へり  
事ありその折<sup>トキ</sup>あり如頼娃即ちのわたりまとい  
てましけん事を 帝御即位後の事のやうに  
謀りしとくえりまの婦女のちり論  
論より詞をみれをいとくちり 猥褻の俗談

ましけりりらと土人愚れりとも 天智の時時  
よりけりまらぬとは論よりし然れを業長以後  
いたりてその詞もつとまのたを志ありて  
たごその論まよその論ひびりいりし拍  
子の道はあり三柱ぬものいすこいでこの時の  
曲あり余垣てありの 征伐とけんえり今も  
後集系十三首如世田家九首ありそのおほよそ  
を志らしむるはあは各その一を志らる如世  
田家よ

まんすらおちやれまんすらおちやれ十五物

の月の輪のこゝろ十五夜の月の光のこゝろ心主を  
八宮笠の二宮笠とそれこそ丹波越後笠と  
新

春は芝咲梅の花は福とむすそを好て四  
けとそを好さむとてのえさそむと川尻浦の  
織の婦の夫あるもの 馭護郡登枝島とて久  
しうゆまにぶらりも慕ひて

みまたせを四日うり島またつりありやくあは  
たぬわらわらひひりやとこの音を設楽の浦と  
流ひつらと云 砥草島を佐渡の流されしにひきて  
今もその島の藪は火ありとそ

物とて一へまのけり川尻浦 右を市田留幹と  
より二島とありえんわらうり しより生つどくとおくは娘へちとあうつり  
と繋按の内宮年中行事とては拍手なりと  
と大當會のあはしとラ聲あり今東國の稚子大  
しめく手とてうつとテウチテウチといへり即手拍  
れり三河國人もあはしとラといふとつり皇都  
とてはしとラといふとつりまは百練抄とて設  
楽神あり三河國とて設楽助あり若くはとラとて  
つりまは丹後國とて設楽莊ありまはしとラとて  
みまらこれ設楽を佐渡の称れり今東國小

て七類とつひてアレグラとくくも 不相承の  
りひこさく又いふ人の風俗前を今昔傳の辭  
類とそや、とぬり、くらみよその一をを志る  
し古本風俗前彼乃行

加乃由之波安、加利加久字、久比加加  
利奈良波安、波礼也止字止字加利奈良波奈  
乃利曾世末之奈乎久、比奈利也止字止字注  
かのやとくくはら鶴、雁ぬらむハヤトラトラ  
ぬらむ名安とせま、汝を鶴ぬらむトウトラ  
少く就て参有寸参

和泉式部琵琶の縁起

日向國諺師高岡郷真金山法并岳寺、和泉式  
部奉納琵琶乃縁起何、寺記とくく、式部正業  
二年此寺、つら、按る、和泉式部  
を越前守大江雅致ハチ女メ、長原資与ハチ子  
とれ、長原保男又熊江式部、一條院の御宇  
昔保元平、つら、白河院の御宇、景  
保元年、平、つら、正業、光嚴院の御宇、雅  
致ハチ女メの式  
部、あ、の事、つら、つら、式部、官、名、





人を引て其より来りしよりけりし人其より通矣其  
地南北二十里斗東西四百里其地古より長  
五人ありし其人を分治以因て其村と云東に豊  
後隣西に熊存に接し南に東麻と距北に阿蘇  
に亘り方人家を去り各二十里余山谷險絶榛莽  
路に塞ぎ其人を治り導と為りありし其地然  
中人といへば名多しと不能而其地曠と除くの外  
其地人妻に來りしとを不許せりし其地昔に能  
せり其俗質直にして武と好み各分地ありて賦  
税を不出衣食自ら足争訟ありし其地所藏樂器

刀劍及百餘の器賦茲平族の齋致以而遠ハ千余  
年近そ六百年よりけり細川氏熊本を治するに  
及て其村其管内に在り村長一人歳に一度治職  
を爲て正歳を契し熊皮を奉りて誓と爲り其人  
自謂高貴の族世中の人を以て傲然として自言  
熊本侯壇十苞を賜て遺傳以因て以て常と爲り  
是よりけりしめり壇ありしを以て五長賜と領  
珍とすりし珠玉に遇たり貧者或は生中一帯を  
之に人家各壇少許を蓄へ依りてみ社前柱上  
に俵置朝夕拜祝之を壇と見りしといふ疾病あり

ありてこれと則ち多しを之に其人多し事不  
余歳と云那須と云村し南とあり之平裔之平族  
の通事謹言と云那須某者宗高第之孫右府の命  
を文と此と来り搜捕平族既と微りて復興以  
り之不能と計て乃地盜を斬騷謹言と致し詭て  
窮討して唯於ぬきと報す多し逆と爲て此地を  
慎以平族皆那須を冒族也と云故とて平族並  
に全族を蒙りて那須族二姓と別りて之を以て此  
其人人を去りて羈属相去りて二十里斗言室谷と推業  
山と那須と接其人すて平裔其と熊本と羈属其

米良と推業山と隣り 南朝の衰菊池氏盡其地  
を失ひ逃去て此と玉道馬の家以地と方二十里  
斗山谷多く平地少し天正多し玉道若米良氏降  
を請ひ就て此地と封り吾内度と以一人去治  
庸と那須人去と去り二十里斗山絶危険馬を行  
て不能故と其地と馬那と米良氏往來と竹輪と  
兼取形籠の如く戸簾屋蓋ぬし遇雨則蓑笠と着  
しと其中と坐りて四隅と繩を係て之とて控行  
せしと備りて州谷と土と盛りて敷せり故と山谷  
を涉りて顛墜せり岩石と少りて傷損ぬしと云○

越後ふ山平族の一聚今尚ありといふ尋  
て後よりあらん

韓人の裔

張弘公即惟新慶長四年に朝鮮より歸陳の子トキ廿  
一姓を倭へ率へり即ち安鄭朴李羅燕姜金千黃  
張林車朱盧河陳白沈丁崔、の廿一姓あり它二  
姓は琉球に遷り它二姓ハ亡り慶長歸順の時  
に男女八十餘人を以て國中に散在しけりが寛  
文九年に封内苗代川に一叢せしむ其人其地の  
塩三ともくらしめて博塩を以て世營とせしむ當時

惟新公韓土の塩ともて封内帳伏御の陶匠に  
命じて茶器と博塩せしむその印記三等あり韓  
字三等あり茶器字様のもの一等あり後悉くこ  
れと毀しむそのうち一等軍にせし存ししを  
古帳伏と稱しし未茶家の尙賞玩せしもの也  
さて歸順の人今日にいたるまで舊俗を改め  
慶賀の礼と改む時ハ則ち笠を戴き烟巾を着長  
短衣常衣を韓語を誦し韓字を學ぶ其戸口今  
よりして凡四百餘字男女一千四百餘人に近  
ます分處して鹿屋郷に遷せりその戸口八十男

女四百餘人あり歸順の裔孫朴方貫いり先  
公蓋し芳意ありて慈愍を長城に照らすの形らん  
臣 樂常々たるをりて秋 邦春推名法水兩廟よ  
り韓人朝貢し然且 銘明天皇七十年紀載する  
三島 埴廬ニイホ同廿六年紀にも載する高麗人頭ツム孫ム喇  
耶陞ハ等投化於筑紫直山背國今前原奈良山村高  
麗人之先祖也す 元正天皇靈龜二年高麗一  
千七百九十人遷居在國けたり高麗郡高麗その  
故墟なるへしと北と其の舊態更みりたり皆  
穡に化せり程詳なる事は征韓録に之をり

何欽玄

元和年のちめ廣東潮別澄海縣の人何欽玄と  
すその日向國ミナソノ於城に投化して醫を業として自ら  
杏林翁と稱しし時寛永年の辰同郡の山中  
に始て節考を采得て自製して用ひしうこれす  
しと斯印の人考あることを志ししう其をくは  
予ら人參譜にありしう収て成形是說中は阿  
り照し刻しなり

樵雪子

千尋川の傍平傳郷又歸化の人有りてをやくす

胡盧形の籃爐を作ると其嘗と其俗は籃火鉢といひて今も尚その御まゝつくりいたせりいよ一蓋しその人の名を乱す所の取らざるその人淡墨の画をぬく画き人の清人とみふ画をおくまゝるとそと名を忘らせりと取らざる時一顆の印を押し置りて今もつくり小筆撫子の子の二字ありそれより人まれと志すつりとそわれその籃爐を稱して撫子といふ籃爐曰製のもの清佐まれと撰りたり但船を科考つとつとれりのみ違なり

秋月

画人秋月は薩摩の人といふ城権頭とつくり東御某氏法に某氏ゆゑと兄弟なり 大中公の時軍事いよいよ罷さるるに権頭一人之をぬりりりつちて遁行するも其に死すものと数年ものつらぬるを志するも時を阿れ周防國山口に米元山守長吉雪舟和尙の弟子とぬり出家して阿りたりや一歩くこれと兄弟の内周防に往て意を訪えていたくつゝ一族皆今も公の恩過を慕ひたれと僧も帰國を願ふ

とついでにこれとておぼひてん 即ち旅  
そひし日向國キリシタ細島驛をこへて在りし  
時、公の世祝は稱揚し、カキ後加治木公日卒  
うへに信禰の子あり寶傳のカキ城十郎との遠  
祖なりとついでに如く名画に罕く見ん

高元盛

三曉菴談話云言一覽一説なり於長崎出生之嫡  
子嶋麟二男之泰と申之泰と八歳より菖蕨稻立  
膝下より召出ぬ如主之學文章蹟著却る如傳  
て此の文醫術も蹟も違ふなり一覽死後元盛事

國に可成る物とて在り島なり 宋辰の又長  
崎へ差出ぬ家新井筑後守成忠所承とては旗  
之より召出深見新と申す泰の字とて  
俗と改へりとも○按跡を天崎と申す清と名あ  
りず、按之より之の傳当詳に全篇あり予は眼  
録抄卷第十一に記載に

真幸一サキ正真

真幸のりとは大隅の國の地名なり正高其地より生  
れたれと後々がかり呼んで真幸を姓とぬるを  
いへりともめより同字の傳とあり頗る奇なり





華人と師と

藩臣小條某氏之儀名和と琉人を介して華人の  
書と學島津某氏増也もかくの如くして詩を學  
名山樓詩集を著し忠玉宗因を關中の黃道謙と  
從て書を學びしより道謙を長崎へわたり來れる  
人こそ其の以ていふも之を彼を極く高家と稱す  
しうしう宗因を長崎に送るもいふ事あり○凡  
唐山之便里するものも亦附庸の中山人歳貢  
者に属して其の便里を治るなり

熊澤了海

或人云傳人熊澤氏をわらぬ浪人を平右衛  
門としりあるは江戸文者に在り薩摩の有日  
島津甲斐氏の許にいたりその從者より一らく  
某事を熊澤平右衛門とわらぬ浪人形りたりは薩  
へ奉仕の類ありて其わらぬ浪人は厚くわ  
らぬ大術あり此より甲斐藩に由りて強しと陳  
るに之即ちさうしうにわらぬ浪人を當るに  
しとしりその言の如く報しぬ平右衛門とわらぬ  
に歸りて後一月をて其傳前島山侯に並傳しと  
り此人昔よりさうしうにわらぬ浪人を當るに薩摩の有日

よのつねの人とおもひしと疎忽ありと時人の  
つらとと了海後は国山を辭して醍醐日潜居  
醍醐隨筆を著す他の撰果を當ね動ありて世に刊  
布凡人の善く知らずなり

定西

元和のころ武藏江戶郡に定西と申道心河の此  
人もと石見の庵なり年十九の時天正年とさ  
へき使ありて薩摩の屋形の茶師法眼りもと  
後住の屋形の位に比志島といふ人阿の鹿思島  
より七八里隔てありこの人乃娘九歳のころ口

中又瘰のいそきと痛みおやめると十日あまり  
湯水と人猿の法眼のれと珍て菓をいたし飯  
をたしとて是のころに傳ツケたれと明りあり  
とそとみよ愈しりたる定西此菓方をつとたり  
たり琉球より今般の使者も比志貴の王子とて  
王の弟なり鹿思島に逗留のうちにちあきと  
て法眼の菓を服せりこのちおみをりちて定西  
琉球へとつたりたりとてあはれ志貴の島より  
きて船待れ其下目の娘年十二三なりとちがそ  
の口中痛て日久しく食事をたちり船中又琉

球の醫師ありて業すれども利せざればよりて  
定西業をあへてこれれん日あつたて愈さるるそ  
きより琉球那波の港に着て一日舟所として日存  
人牛の人赤二三十軒ありては辰多し日及び過  
る物すさるるら門の戸を叩きそりてらく日本  
人の中は定西とてしるしとのありとあつた馬  
を引せまゝしるしをきくの由用あれどもやくと  
て馬のせま行此使え王子の由内のもこの夜  
あつた着王子の被に到れり王子定西の對面  
しと宣ふ根由を述べらるる別義ありし由宣の

口中をぬき給ふといさし此二十日汁湯ありて絶  
ちたり唐土の療法かして効あり佐志貴王下  
司の女ら口中を傾ふ時汝業をあへて効あり  
し如く述べこれすすみやうの后宮の病を治はば  
しと宣ひたりしより二業を呈ししとみは愈し  
り右の功より芳志ありて福建の船一艘をう  
けて名とヤトカナソメと名付られりその後日  
もあつた入唐志々多しが終に伴て本國石見國へ  
歸り時より大岡秀吉他界の役関を京疎ありて當由  
代りわたりて石見國の代官大久保十景掃後石

見事な任に石見の娘を出てふきあふこと夥  
し其時定西近所業内の者おれを呼ぶ娘山  
の事おどろけたまふり多しと定西一人の娘  
あり年十六生立ちけれ石見者これを妻  
とぬしうり是より定西寄り榮ふる上限那  
し合浪もちまうちたり石見守んいり威厳  
ありて甲斐佐渡をわたりまゝして日本國を  
代官とりふりぬく榮を極りぬく翁よりけり百  
姓をぬくまひたまふかきりぬく人を殺し堀と  
ころはがぬく竟り天命盡く駭けりて成敗あ

りて駭け責といふ責は連て死しうりて時際し  
て其時定西も駭け入たしひりれて考案し及ふ  
べりうりて連て言上し合浪然室女等も海に指  
上たれも定西命せしと定西はゆるされしと  
定西もと娘山の案内能志をぬく下代と  
は信守とまゝとてやうて信守といふ寺に  
まかり出家すとうけたりぬけりつむらゝ志里  
いふ人の定西の俗名を尋り何の志摩守とら  
かせし今忘れしうりて云○此一篇蘭化隨筆  
に載しうり蘭化を中津屋の侍醫前野良琢なり

穎川某字學の通考

穎川某字學の通考と云ふ士あり少年より好む字書  
を通覽しよく音韻字彙匡一經史百家を不用  
の字といへと詳解せざる事れし其は西漢の一奇  
人なり然るも一行の文辭なりといふも一奇  
あり字學の経業は家牒數十頭を遺ふといふも  
一奇なり

油菘紙の解

朝鮮使貢物のうち油菘紙といふものあり  
楮幣といふものもついで方六七尺より油菘紙

たしよく乾楮一布とぬせしものなり故に一布  
涼布ともいひり亡友柴博士栗山油菘紙の義を吾  
の賢しむるも考もまじ解し之は時又寛政八年  
去薩摩より朝鮮の漁船山川御は漂到は  
船主を尹應衡といひり藩の朝鮮記士大智庵  
例より多く漂到の始末及び其書を記す次  
油菘紙の事を尋ぬるは船主言油菘紙の菘を日本  
ていふ筈の菘なり船の筈を草菘茅菘ともいひ  
油菘紙を驛馬は履をせしる所の履紙なり用  
ふれをかくといふ是菘を朝鮮の方言なりと今

解く之をうりて栗山世を解く之を解く  
ふりて念一嘆ぬる花庵を考ふ從て名物を問ふ  
とのこ

西安窯器 或云廣東窯器

藩の處士増田直次といふもの好古の癖有り  
世稀なる人ありて西藩の蕙蔭堂ありといふ  
蕙蔭堂浪速人本世南あり直次中山人より西安  
窯器の法を授ていふる窯を居てこれを製し  
いふるされといふ法を人より許され考ふ於て用なけ  
れも敢ていふる○曹明仲拈古書論云大食窯器

皿以銅作身用茶燒成 五色花者其佛郎嵌相似嘗  
是香爐花瓶合思蓋子之類但可婦人閨閣之中用  
非士大夫文房清玩也又謂之鬼國窯今雲南人在  
東師多作酒盞俗呼曰鬼國嵌内府作者細潤可愛  
按曰大食窯といふの骨董肆人西安窯といふものは  
あり佛郎嵌を陶説のみいふる肆人廣東窯といふ  
ものは是なりとて佛郎嵌をいふるを廣東の  
稱を昌せしむ由ありあり外傳の大艘といふよ  
り廣東潮別の魁<sup>ニナト</sup>鐵猫を繫て文易を賣きその  
殊方吳越の産と廣東より福祿壽剛の旨を運送

一又、此をわねに、磯ありあり、よして福厚の佐廣  
東よりいだけし、よきとてその地名を帯輝とせ  
るなり、即亞墨利加人參を廣東人參といひ、泥蘭  
度布と廣東結と、ソへり、龍あり斯方より、も方物  
發賣の地と、帯輝とれせ、ものま、おほ、佛郎  
崙と西安空器と、よ、誤なり

花桐獨木船

寛政八年丙辰、嶺南の府署院よりあり、一時、老公  
の侍臣より、吳木一梟を審定せしむ、り上好花桐  
木と記し、れ日ぬら、れ、門人上望道林、来りて

言、近き、以琉球人海をわたり、舊の内港より入、此  
洋中あり、獨木船の漂到す、と、これとて、  
船の後人、繫、其、舟り、府内の、之、船匠人、これと、  
り、よ、ま、よ、花桐木の、船、刻、れ、ん、購、えて、之、船の、料、  
一、百、餘、挺、を、つ、く、り、え、り、其、一、枚、を、も、つ、り、一、先、  
生、琉球、産、木、と、審、定、し、て、京、記、を、お、く、か、し、と、敢、  
て、清、り、り、こ、そ、ま、る、り、日、上、好、花、桐、木、と、審、定、し、  
て、記、上、し、る、もの、舟、り、道、林、然、し、て、舟、り、ぬ、是、海、  
外、の、産、り、て、禁、物、れ、ん、りの、匠、を、法、問、し、て、百、  
餘、挺、の、朽、及、ひ、片、梟、ま、て、殘、ぬ、く、局、中、に、納、め、たり

匠も傷感日々急ぐらん竟病をかり死て  
けり是れづからおのれを歎き迷ひ禁を冒せ  
罪ぬれん天これと罰しけりさそかゝるるむ  
らく香木の漂到せし後の一奇なり

能津菩薩

近古唐人能津菩薩と云ひ一人あり少かり  
くより深く佛道を入みゆら世尊降誕の時  
維衛武傷隨葉の世を説きまみづらおのれ  
の像ありとを釋氏のすめをうけ人し掩し  
すみづら菩薩と稱すをこれ唐人あり増

田直次

維衛佛式佛隨葉佛と七佛のうち三佛あり  
昔姓の公命を奉り空海砂磔抄を纂録し其  
をけり七佛を載し

空海に贈位を賜ふ 宣言の写し  
佛燈大法師位空海

右贈可法印大和尚位

勅智慧峯高菩提月朗持三密之法印為四輩之儀  
刑人亡道盛世舊名新惟景慕之甚深念追崇而何  
止肆贈寵章式賁幽魄可依前件主者施行



貞觀六年三月廿七日

中務卿三良兼行上野大守臣時康親王門主

從四位上行中務大輔臣輔世王奉

從五位下守中務少輔臣橘朝臣主雄王奉

奉

勅如右牒到奉行

貞觀六年三月廿八日

賀陽親王

包

品行治部卿

從五位上守治部大輔

參議正四位下行左大辨兼  
勘解由長官 年名

告贈可法印大和尚位下空海奉

勅如右符到奉

大錄氏立

治部少輔  
從五位下 忠宗

少錄福守  
少錄宗氏

貞觀六年三月廿九日下

空海之法印牌を賜ふに吊贈位なりとの

宣旨存書ハ薩摩志坊津一乘院の什物あり老

臣皇山君了然て可なりと云ふ此書のこ

の寺ありしを詳せし後尋ねん宣  
古の書格印墨の影撰を別と志らし又梅  
と猶位は法印辨を賜ふ事を蓋し空海は始

三曉菴雜志

この雜志二卷を宝曆中は薩摩五人三曉菴著菴  
主は道木村と子一名静徳といひり蓋し隠士  
り好て画をよくし風花雪月をとりし事  
老し此世の古き物ら道徳を論し茶事を志  
りし其土俗の雅淡を奉り市田智新君許  
より書贈せり此ゆ

びらううちえ かようちえ

日本書記は檳榔島とありを今云日向志布施  
郷のびらう島あり其島中も今も蒲葵多し生  
るなりさしいしへ蒲葵をあらまきしり六史  
志らし書紀は蒲葵と檳榔と志らしを誤ぬ  
其今もいならまき島の名を檳榔といひしを誤  
をもて誤り傳へし事まじし其郷も蒲  
葵もさつらるるをびらううちえといへり今も  
いならまきし其その名を改むるを  
寛政年  
以来  
り 老云 巨槩はこれに質しめり 是晋王羲之  
公の第

詩のいふ蒲葵扇ぬり環球書にこれをつくる志  
布施の製蓋しこれに倣へるありてまじき  
もつとれしとて又檜柳毛の御輿の料はぬり  
も秋藩の意ぬり

薩摩五 心まこつとるるちまの國を  
春日惣駈地の繪巻おのうちまこつとるいよく  
の製作今ひとり秋藩まのし備へしあり唐山ま  
こ科者ともつとるも蓋しを秋より備へし  
ぬらん

外城

藩府より支封諸郷を外城といふ肥後西より  
し菊池の外城十八所あり今も外城あり是  
らも薩の支封を外城と云ふおぬしとて人あ  
らひも備用し誤り外城を外城と云ふものあり  
形はあつたを判せしとおのれが産息をとり  
れみのつら醜をかやうせり日向國諸郷の  
外城といふ地名ありて舊名外島といひし  
しと神皇御宇の墟あり故にわとていひしとそ  
釋文より南浦文集に薩摩を思ふといふ是ら  
も詩人文人のしたる地名を製するに倣ひし

詩文の上は初は志多せりと文之これを見奉る人  
 銭 邦の典故より近者近江國僧之能くか  
 外城と都城とをさしてや  
 といひて蓋し元龜天正の頃は始りて也と  
 云々繁おもふは肥後且は菊池の外城ありと守  
 菊池二郎言直に汝 言食 の頃の人形れ文  
 治七年安徳 忠久は島津の御莊へ補せり水  
 ひくはより我 公の封内も既し外城の称あ  
 りらん形くく後日身ねん

封内郡郷及屋爲目次

薩摩國管十三訓和名抄。舊置傍  
 ○伊佐郡伊佐郡 利納今不審 一郷 大口 羽月 山野  
 郡答院近古置 佐志 黒木 蔭年田  
 大村 山崎 宮之城今置 七郷  
 ○薩摩郡 避石 暢利 日置今不審 三郷 東郷トウゴウ  
 隈之城シヤウ 高江 百次 平佐 串木野 入束イリキ  
 院 山田近古置 榎原 中郷今置 二郷  
 ○鹿兒島郡 都萬 在次 安薩今不審 三郷 吉田  
 鹿兒島 永吉近古置 三郷  
 ○日置郡 富多 納薩 合良今不審 三郷 伊集院

満家院 布束 串木野 日置 近古置 郡山

吉利 永去 今置 御

○阿多郡 阿多 伊作 田布施 近古置 阿多 河多 今置 御

在鉾 御不審 阿多 伊作 田布施 近古置

○河邊郡 川上 稻積 当河 近古置 今不審 在河

邊 加世 旧近 御古置 山田 鹿籠 久志 坊泊

秋田 硫磺島 今置 御

○穎娃郡 同 今在 同 穎娃 今置 御 今和泉 山川 今置

○揖宿郡 揖宿 在 御 今置 御 今和泉 山川 今置

二御共 三御

○給黎郡 給黎 今置 御 知覽 給黎 今置 御

○谿山郡 谷山 各上 久佐 今置 御 伊佐 知佐 御

○伊佐知佐 山田 今置 御 伊佐 知佐 御

○出水郡 山内 勢度 借家 大家 團形 置

五御 今置 出水 山内 院 莫根 今置 御 高尾

野 野田 阿久根 長島 今置 御

○高城郡 合志 飽多 鬱木 宇土 新多

託萬 今不置 御 高城 水引 近古置 御

○甌島郡 管管 甌島 今置 御 上甌島 下

靛島 近古置

薩摩國屬島 長島 硫磺島 靛島 以上三島既出

黑島 口之島 中之島 諏訪之瀬島 臥

蛇島 平島 悪石島 宝島 以上九島在河辺新

獅子島 在出

大隅國 和名抄云和銅六年新日向日向四郡置大 管入

○菱川郡 羽野 七野 大水 以上三名 菱川 置

○大良院 近古置 馬越 湯之尾 曾水 本城

○桑原郡 今置 大原 大分 豊國 管西 循積

續日本紀元明天皇和銅六年夏

置八郡今不審 吉松

四月乙未割日向國肝城贈於大

栗野 横川 近古置

隅始羅四郡始置大隅國 鹿屋 岐刀 今不審 四郡

祐佐 蒲生 加治木 溝邊 近古置 重富 山

田 今置二郡

○嚼吹郡 葛例 志摩 注云四阿氣 方後 人

野 舊置五郡 嚼吹 清水 東國分 敷根 福

山 財部 恒吉 末吉 近古置

○肝屬郡 桑原 鷹屋 川上 鷹麻 今不審 四郡

大始良 串良 新城 鹿屋 百引 高山 舊

靛島 近古置

薩摩國屬島 長島 硫磺島 靛島 以上三竹島

黑島 口之島 中之島 諏訪之瀬島 臥

蛇島 平島 悪石島 宝島 以上九島 瀬島

獅子島 水在出

大隅國 和名抄云和銅六年削日向四郡置大 管入

○菱刈郡 羽野 七野 大水 今上不審 菱刈 置

○大良院 近古置 馬越 湯之尾 曾水 牛城

○桑原郡 今置 大原 大分 豊國 答西 狹積

廣田 桑善 仲川 注云國用中津川三字 吉松

○始羅郡 野裏 串伎 鹿屋 岐刀 今不審 四郷

○沽佐 蒲生 加治木 溝邊 近古置 重富 山

○田 今置 共古郷

○嚼吹郡 葛例 志摩 注云四阿字 方後 人

野 今不審 嚼吹 清水 東國分 敷根 福

山 財部 恒吉 末吉 近古置

○肝屬郡 桑原 鷹屋 川上 鷹麻 今不審 四郷

大始良 串良 新城 鹿屋 百引 高山 云

桑原郡

唐屋始良七舊置内浦 高隈 牛根今置三郷

○大隅郡 人野 大隅 謂列 始今置三郷

在大阿 改以上不審稱寝當称覆根占称鹿屋

垂水 牛根 向之島今云按島田代 佐多

今置二郷 共七郷

○熊毛郡 熊毛 幸毛 河枚注云有三郷○種

子島 駒毛島古置二郷○近

○取護郡 護賢 信有今舊二郷屋久島一近古置

大隅國属島 種子島 駒毛 屋久島既出

日向國管五封内管一

諸縣郡 財部今縣田 瓜生注云宇利布乃山

鹿 穆佐院村 穆佐之内 八代以上 大田春

野舊置不審 吉田 馬関田加久藤 飯野

小林 須木 高原 野尻 内山 飯田

綾 穆佐院 八代 松山 救仁院 三俣院

庄内 財部 末走近古置 高崎 高城 高

岡 倉岡 山之口 勝岡 柳之城 志布拖

大崎今置九郷 共

日向國属島 檳榔島在志布

本文分註記舊置者即和名抄所載也記近古者



往歲所記上 官局也記分置者今未所製地圖  
分目也

客中讀書目

欽定授時通考二十四卷乾隆七年和碩和親王臣  
弘晝鄂爾泰趙廷玉同纂此書農政の顛末としる  
にも更ニ審ありの利諸法ハ悉く圖に示し  
之精妙を極めしりす之穀の名称も府縣の稱  
呼及び異品奇産を載しり

康熙耕織圖二卷耕は外漫種より入倉まで織  
は則洛繭より剪帛まで其圖式の精工

密緻いふへし其按に宋の郭勣古史維揚の仲播  
璫高宗中興のちのありて當て臨安於潛の  
令とあり篤く民事を盡し深く農史藝婦の勞を  
念ぬ末と訪ねし其圖をつくりて其事を状  
ありつしり其詩を伴て其圖を述へ上進り康熙  
年製の耕織二圖合く宋より其詩は名歌  
も之と相おれし

康熙の耕織圖は姪路産翻鑲し其小字をハ延  
宝丙辰のち一系師人虚翁といへり其の又画  
本を拓し其を刻し其小字其跋文は其

活異通程を草擬新玉巻に作例汪詠菴本草備要  
に略お似し西洋参症得亦八角金盤等の異名何  
り備要に比すり甚智明部志られとも呉氏  
仁氏と致し

西洋参を法依の古よいへる西洋参あり洋参ハ知  
草肆の所へる庄東人考あり余はしめ擬新と  
よみて世に此説を廣む

明陳世元金薯傳習錄ニ卷金薯と甘藷ありは  
め也拾金薯傳習錄ニ卷金薯と甘藷ありは  
め也拾金薯傳習錄ニ卷金薯と甘藷ありは

陳氏舊の刊用効徳を表すると更ニ洋参あり  
より次養子と時の名流その刊用の効及詩賦を  
考ふるに幾百首の書あり世にわきまありと部  
余加し一週と写し之たり

元呂東萊詩注朱傳注釈ニ寸卷培田子直隸以披  
覽一過すり之體裁尤氏増説とや、吳ありと  
水名物の釈に大氏鄭漢仲よりもの何指古  
義毛亮晴鳥名考より、此書を引さるん何そ  
也

王漢洋感舊集十卷漁洋深く華夷交遊を感し明

香の名伝習と蕪と情律をうくるものまゝ、錢牧  
言屈翁山の傳佛徒に化せしも皆悉く小傳を附  
してその詩を彙集ししなり

情傳鐘嶠百花詩二卷は、その歌詠にありて詳本  
におほくハ唐詩を語りしよりその詠するに及んで  
七絶ありて其状をつくく、後又元の馮梅堂百  
梅の和詩ありて出題更に奇あり

明初撰録綱目四卷文章詩賦云云及び古玩の  
品評渾雜ありて實に悦進佳玩の書なり、按て其  
題の稍異ありて略多きものなり、一編ありて宋人

著述し終るもの五日あり余いささみれば

清顧炎武群書利病書字本二十帙錯観するに字  
成一人の字ありて其精原考ありて精ありしあり  
ても正整宋元此人に譲らるれば其考より用たるれ  
と其精字と錯観して日を異に佳玩とれしつさ  
るる書此大方ハ其利病をとりて其考より十五卷に  
り府縣の志志と批纂せしなり、其考より、顧氏此  
みつらら輯するものあり也、其考をよらるれば

清周煜環球志史略云、其周氏冊封此時、其考を  
りし、其徐氏傳信録に比其考より、其考ありて其考

水と徐氏の稿ありよりあらん

琉球書系譜一卷作例ハ新方の流家系譜を擬  
し

琉球島略圖説一卷おほくハ原君美南島志  
よりのことと志と逸すもの類あり

釈文之南備文集二巻おほく古今典故及び  
をしりしり此中の外より取らるる比古を  
し

三曉菴報志二巻既よりしりしり

名山樓詩集四巻 公族島津錦水君の著述あり

勉て陳辭と目古調をよりしり新趣を詠はれあり

日坡調より玉ふあらん

文政壬午に遺行二巻を刻は既し仰屋録  
巻外よりしりしり

我藩をいしりしり正學よりしり士を四書六經  
と宗と醫と素靈傳寔令遺子令外藝と方と  
し偶に薛己十六種とよむものありしり取ら

珍奇の書を藏むるものありしり但府庫に古本東  
鑑を収めしりと秘をよりしり諸人の観を許し  
玉ふ

45625

